小笠原島紀事

二十

和書門 類
二九三四五 號
二三七 函
一二 架
三三 冊

内閣文庫
和書 類
二九三四五 號
三三 冊
七三 函
一四 架

地 七九

内閣文庫
番號 和 29345
冊數 33（20）
函號 173 181

国立公文書館
National Archives of Japan

十八

九十三丁丹

凡工帳記

日本政府圖書

淺草文庫

小笠原島紀事巻之十八

目録

○小笠原島風土記

内 一〇八八八號

小笠原島風土記

目録

小笠原島誌書巻之二十八

小笠原島風土畧記

小笠原島ハ伊豆南海中にある一叢島也英國倫敦偏東百四十二度十五分を其の諸島の中線として北緯二十七度十二分より迄南二十六度三十分まての間に散布せる大小凡そ八十餘島ありと云へとも父母兄弟姉妹に分ち其六島ハ指しく名付へきものあるのミ餘ハ皆礁石の海上に露はるゝものにして島といふに足らぬ者也文禄二癸巳年朝鮮征陣の折柄（西暦千五百九十三年）信州深志の城主小笠原大膳大夫長時の嫡孫にし

内 一〇八八八號

て民部少輔貞頼といふもの烈祖の麾下に属し奉り東帰の時初めて此島を見出し其絵図物産を献せしかは烈祖大いに感賞ありて永く領地に下しおかれ且島名をも貞頼か姓氏に基き小笠原島と呼ふへき旨を上意ありて其子民部長直の代迄も渡航せし由なれとも海路の険悪なるにやありしや又は海外通航の禁厳なりしより嫌を避るにや中絶に及ひしか延宝のころ紀州より蜜柑を載せて江戸に航する航海上颶風に遭ひ南方へ漂流して此島に至り後に順風を得て内地に帰る事を得て其状を

具にし是を官府に訴へしかは官途に再ひ開墾之つきの設ありしに長崎のものにして島谷市左衛門といへるもの航海業計の学に名ありけれはとて其撰に膺りて航路を命せらる是に其子同苗太郎左衛門江戸小網町の大工にして八兵衛といへるものは舟組を中尾兵左衛門と称るの上乗と也新に唐製に擬して製造せられし富國壽航と号を其五百石積の官船に駕し同三卯年閏四月五日下田から開船し同月廿九日同島に着し其島々く一ヶ月余にして亦と巡覧の上物産土宜を探索し異草奇木を取り船積し

大神宮へ御詫し鶏の羽数を算し六月五日を以て彼
地を発し同十五日大田へ着船し是皆復命せしか再ひ
何の沙汰もなくして事止みたりて後其の民部
長吏の孫にして宮内貞佳といへるもの其祖先の旅行以て
彼島の渡海を願ふ享保十二年に至り船に乗り見届へき旨免許
ありて大坂より船を仕出せしか中途難破せしにや帰
国せしは其他出船の難風に逢ひて南方人なき島に漂
着し年を経て帰国せるものは寛文九年十一月紀
州蜜柑船の船頭長右衛門享保三年六月遠州荒井
の船頭等八天明五年正月土州香我美郡東（赤カ）岡村船

頭儀七何れも口供によるに大同小異にして多くは此
島の一部に着せるものと覚ゆ只儀七の口供中に噴
火山ありて焼砂を噴出せることあれとも猶其他の島国に在
るや覚束なし近くは天保十年十一月奥州氣仙郡
船頭三人も亦漂流して翌十一年三月下総へ帰着
せしもあり其口供によれば島人の言語英語を用ひて
住宅舟楫等の事全く此島に在るか如し閲ぬるに
に西洋各国にてハ彼暦数一千八百十七年我文化十四年
初て此島有るを知れる由ウヰツトカムプ地理書
中に見ゆれとも是を持出せし人の記事は同二十七年

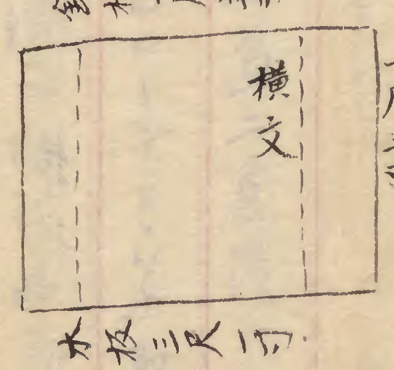
我文政十年に英國の客船ブロスリムの甲比丹ヒーチエ
イ此島にハ来り其港の深浅島々の位置等を測量
し是を英國の所領と定め其由を銅板に書記し樹
上に釘付し國旗をも建置り蓋し此時既に移住を
なすもの有りしと見ゆ土民の云ふ處によるに三十年
を以て初る此土に来り此地を創開すと 彼理紀行中にも右の如く云
りされどもビイチエーの國旗を建しると全く人
すまざる處と思はるゝ事實あり 不審 右の如くし
して我國の甲比丹リエツケも此島に到り本國の所
領と爲すを計畫し因て彼も其年月詳ならざれ 彼理
紀行中には二十八年と有り 土
民の云ふ處によれば雄等(?)千八百五十三年に

米利幹合衆國海軍都督彼理に至り初て此島の全
體を巡検し島民を集め約束を定め其國民の首として
移住せるものセイボレーを立て此島の政司となす 事彼理紀行に詳なり
此島の名初めプロウヒス島と唱へしは是班牙の名なる
よしなれども全く其名を用ひ居り 是班牙語にて初て名を付しは是班牙人の称ひ
なきにしまさるべしといへども英國のビーチエーをフランシスへ
と云ふ人を考ふるもあれども
りと名付けりしなれども今其島内の一島の名のみ
残りて此方にて以つる母島をのみベーリー島と称呼す
又ボニンと唱ふ其方の諸間にて人なき島なる故以て
無人島とよびし其訛称せるにて漢人の波寧と書せる

ハボニンの音譯なるべし

一 洲崎村古名なり父島二見港の入口東の方にあり英国人称してチーフウイルレーチといふ即ち最要の村落といふ義なり此村西南方は正に西に向ひ西に野牛山への岬狭の海峡を隔て相連なり其岬激の岬角に出して注意すべし南方は牧場の海湾ありて南崎に連りて遥に母島と相望む前に群島あり西北は根分山を隔て扇ケ浦に接し旭山下に至りて奥村に堺し敷て港湾に沿ひて大村と相望む今英人のトコシアツチウエフ爰に住居す最早外国人の此島に来りしもの皆此村に居を占しり後追て各地へ引分れしより云傳ふ西洋紀元千八百二十七年英国軍艦ブロスリム指揮役エフトブリユー、ビーチイ貝第六月十四日此地に来り英国に領と定む其旨を木板に書銅板を張りて岸に掲げしもの今猶ウエブの家に存在し且当時の測量書をも蔵せり又同人の話しを聞くに当時英国旗章は先に至る裏手の山上に建行しり年久しくして風雨の為に破裂せりと

ウエブ所蔵英国
軍艦の差置し
書翰板の図



横文和解
貌利太尼亜王殿下の船フロスソム号船長エフトブリユービイチ名人
千八百二十七年第六月十四日
貌利太尼亜王殿下第四代の
チヨーヂ名人ヨ代りて此諸島を領せり

一扇ケ浦　大港西南の方第一湾の前ニ要岩あり大なる洲
渉と相対し平岡連亘して後れ方九山端山に連なる土
地あり境をなし先英國ジヨーヂホーツン爰に居住し海濱に
今猶其屋二株書圃二百坪余あり云々皆買立にあるなり
州崎村より振分山岐越し宮に至る九七町半其地治
も清渉と相対し左し方二見港にて入口を望し前に小湾

あり又船付宜しきゆへ八後変并ニ外國人庭橋支倉庫
営むる迄諸民の家屋も二十字程連頓しく大小村落
をなし往和人寄れ住る事有きまじくて又其谷開拓
の様意を語る石碑をも此官ニ建有り其文ニ曰

小笠原島新はりの記

伊豆の西ニ八丈の島の南に偏二十七度あまりの
乃みやこれ宮より四度二十七分ニ行あたりて
なきせききかくもくれ島あり浅
東照の神にむかへのおんなおみ孫の二とせといふに小
笠原民部少輔貞頼みゆるしこうむりておもむくわたり

穂えしなれは急永く高る一しとく小笠原島と
いふ名をもたまひたりけれはされと波路のいとあら
あれをますや行かよらむいろしら波をこえふるもあく
那かふうし伐を後享保十三年まかの倉敷の後
まうけける官内貞任をちよ申にかしく安けらふ渡う
たりしと穂のうつハおや母や声を海ふ乞ゝこと
いさ苦しくやおもしましまむさしらはしし
きらをゆ見てもあらしくおむや声ふし穂もしう
るを那れ急きハ行けとも乞とようひせのくまし
しもあら如伐いゆつらうきまくのゝあらんまは風

波をけしきにいゆ中伐由きらふ船路のふうを
まろしふうさけもいふえ比旅ハたてつる事
あらく新たうをよとおきらくさせあひく
ち忠徳のぬし能登帰一言統のぬしらふ此る
のおかちく行うさとうをかひぬ志うあるにたちく
此みつこむの人をさるやことをなき伊ことをのし
おみいとをしやうふ船をそひしくやうくとをつふ
伐とう引んとなりかしいきまことといとなるまをなふ
たゞ見しを沖津島根の石まきたしうしとうを之
にとし見たまひつるへゆまいむとあることとのよし伐

文久元年十二月には殊に洪水にて溢れけ
るとぞ　常に黒河の主水峯村を流る

一　小嶋澤村　湖尻村の東山間なる広地なり　川ありて八ツ瀬川といふ　水源は岩間より出て十四五間もあり　船橋を通ずる事なし　第一の河流なり　西南湖水に入り白砂中に伏流す　此地は山林多く　川の左右も河或は其河の平地あり　地質黒埴にして耕耘に宜し　然れども土地の低きにより国人の之を愛ず　夏秋の際大雨の折は山より流水一時に落来り　浸し漂物なども押流すことありと　予此地に在ること前後三ヶ年　此間に大雨時候しく出水の災一度も見ざりしなり　雨多く

しく忽ち暗出水の害あるべからず　今猶亜米利加人セイボレスウエブ氏の畑地あり　麦く洋芋を植付　英名タロ
廃屋二棟あり　今其中に住せるアナカ人シユークの使ひし家あり　彼理（ペルリ）紀行中にベヤルトテーロルが案内者と雇ひしものなり　今は殆ど荒れて見ゆ

一　八ツ瀬川湖中に柳樹二株あり　湖辺には廃屋二棟畑地数百坪あり　此家は元住居の英人ジヨーヂホーツンがアナカ人より譲り受け耕作せるものなりしが　今は皆買上げなり
是此地の耕耘に適する土性のあるを以て移民を住し　農人に最適の地なるべしとの議にて斯くなりたり　此地移民渡来の後耕作

いふ也又麦并ニ大根野菜の花ひらき出来たり　此地川俣村より五十五町余西
里八ヶ宮の渓流落合ふ所に名づく

一　根分山　海嶋村の裏手にあり図おもて猿ヶ浦猿沢へ
の通路此山下より分岐道程四丁余

一　長谷　小猿沢より入る道にあり老樹陰替下流八ツ
瀬川に入

一　常世瀧　八ツ瀬川の上東手の山より落る瀑布の
傍に檜樹あり

一　野伏間谷　八ツ瀬川の上七八町より東山に迫る處
に至る高さ十余丈直立壁のごとし岩石皆亀甲紋
をなせり此處渓谷樹木陰翳としくし日光を見ることなし
かし大蝙蝠多く居す翼三尺余ともおもふものありしべし
樹多し

一　時雨瀧　野伏間谷にあり巾五六間高サ十丈余也
あまつし絶岩上より平流し水織糸のごとし飛沫霧となり
人衣服を沾ふ滝の名を得る所なり

一　布瀧　八ツ瀬川の源なり時雨の瀧数十歩奥にあり
高さ十間余一筋に下注す

一　南猿沢　小猿沢より山伝へ伐て南にあり地形相おな
じくして少しく西へ向し又流水あり是も八ツ瀬川の大

なるに不及海口に磨屋磨畑あり以前ウエブの住居せ
し處也地味小猿澤を同く耕耘に宜し海濱西手に
平砂ありて小猿澤海口の方に通ぬといへとも海岸絶壁に
て往来なしゆゑに前に一つの出岬あり饅頭崎といふ

一 南崎　此崎金島の南頭にあり遙に母島とおもひ西ハ
方稍平坦の地あり海岸は山多く硅石（本ノマヽ）質を含めり崎は
都小島数多有りて岩石皆劍戟を束ね植たるか如く遠近に
散在せるを指眺望尤よろし

一 野牛島　海崎村の前にありて浅峡を隔て本おと
に連り前ハ大洋に臨み後口ハ大港の灣に臨めり全
島石山にして野牛多く住り北の方山下に大洞あり
洞三ヶ所にして洞中船行自在なり高さ五六丈もあるへし
波理紀行中に僧家するとは此処なるへし且一山あり
状ち円錐形をなし四望皆同状にして入港船の目当
となるまてを講し今飯豊山を名付く西人是をシラガロー
フと唱へ即ち糠餅の義にして其平形状によりなるか
るへし

一 磺山　南嶺の東手海岸にあり山岸欽崩して内に磺石
を出し赤白土あり質甚く軽くして粘力あり石硫黄
あり其島の外國人ここを硫磺あるへしといひ化学家の説

に至る小硫酸礬ありといへり此山より東北の方数里は
間皆絶壁にして双峯あり

一 千尋岩 南嶋より廿町程東北方にして全島の南海
岸なり高さ五六十丈の絶壁の岸にして人跡の至り難
き處なり海もまた全島海岸第一の深き處にして激浪
殊に烈しく穏和の日にても洋中平波の折とても此處を
激浪揺波にして廻島の節危難の處なり

一 丸山 扇ヶ浦の後手にあり西の方猫山と対せり

一 猫山 同しく西の手にあり東丸山と対す扇ヶ浦より巽
港に至る道此両山の間を経る道は葉は大樹ヘゴ等多し

一 連樹谷 扇ヶ浦に流るゝ渓流の源なり樹木繁茂し
枝葉相連なり

一 奥村道 扇ヶ浦より奥村に通ずる山道なり凡二十九町
餘なり

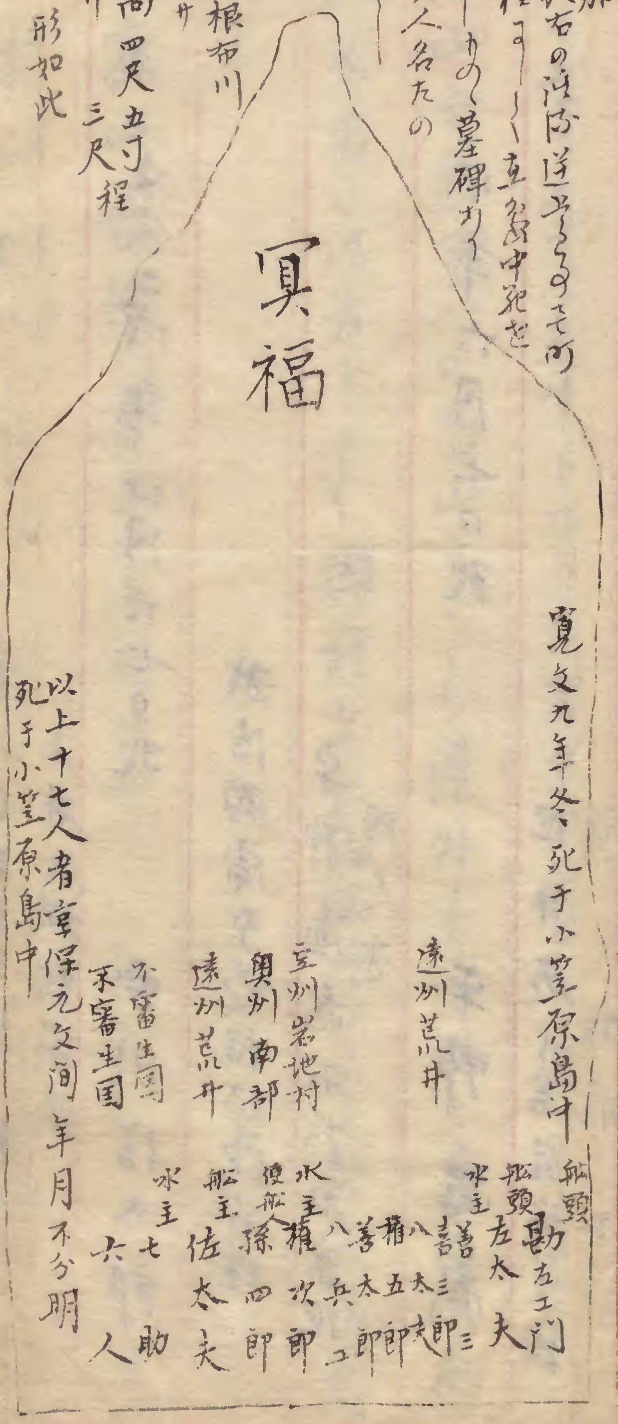
一 巽港道 扇ヶ浦より巽港へ通ずる道なり途中一段岩
三見峯等あり ヘゴ松桑等葉は大樹等多し凡壱里半
程あり

一 象鼻崎 洲崎村小湊深海口との間にある出崎なり
石門有り高サ弐丈程中巾壱丈餘もあるべし

一 奥村 港の奥にあり西は清瀬川に至りて大村に接

し東は堺浦より沖崎村に隣る海濱白砂にして港
内に於ては風雨も陸ころは波甚しく穏なり亜米利加合衆
國の人ネサネルセイボレ此地に住る波理紀升中より
載る事定初此島に來り分國民稍貧れる人にして
貯餞要妻は治城に劫かされしる所とは此人なり現
今全島の所有としく波理の所括し島民條約并に
合衆國の國旗をも所持し居る外カナカ人のジエーク
同居は全くセイボレの奴隷なり盛臨船着島の治宮
初此地に波治所を取建しる地勢不便を以て海崖村
の方へ取建つきに治定せり

一 冥福碑 奥村セイボレの家屋東北方二丁の濱際あり逆
上る事数歩にして於れ平坦の地あり昔年漂泊して
此島に死亡せしもの冥福墓碑を根布川の石に彫
刻して建る其形左の如し



國臨丸乗組士官測量方
土井大炊頭家来　西川信太郎

文久二戌年正月廿七日死

越後國蒲原郡村松濱百姓
平野廣吉忰
同人弟　平野酵吉

同年六月七日死

但年来〻右呂市と称
逆之を酵吉とある

朝陽丸乗組水夫　五人

同年九月中死

一 佐渕奥村ちおの堺ニある川をいふ此川流の口濱道梅

秘候し三板船を寄るは足分ニ石炭を分當外國
入津の船々は皆此つきものハ此地ニ於へ至くつきの積
り因論見ある波理の此島ニ来りし時石炭並場ニ
きんとくセイボレより買上し地なりと廣さ五六万坪斗
りも有り高ゆ五十トルラルをセイボレニ與へしよし
一 地山全島第一の高山ニして港外よりも能く見ゆ國臨
艦着島の時首としく國旗を此山ニ建てり此ニこの名
あり
一 初寐山　堺浦の裏手の山戌ニ
今 初寐浦　堺浦の裏手の浦ニして浦ニ従　平岡ありいま

た閑望されは樹木弐株あり

一 夜明山　和森浦の上は山をいふ

一 巽港　英名ハースイーストベイ即ち東南港の湾あり
港口二三町位奥行八九町もあり東北風を除くの外ハ波
浪も高からされはしくスクネル船位ハ碇泊しうへし然れとも
港中只一條の流水あるのミ也しかして平地なし且両岸と
も絶壁断岸多く八耕種すへき地なし柳樹あり

一 釣濱　宮之濱より隣りし奥村の裏手にあり海岸岩石多
く岩深くしかして魚類多く住つまり居り無論夥しき数ある
谷有り

一 堺浦　奥村海岸村は堺浦あり清水あり沙地頗る廣し
カナカ人住居の跡あり家鴨なと畜ひセイボレの変損にし
ゲ文久二戌年七月中亜米利加合衆国の鯨獵船の乗組
なる佛蘭西人此島の民たらん事を希望し此地に寄セイ
ボレより買求て居を定ん事を頼みしより之を許しより此
ころの鯨獵の漁に長せし同年十月十一月此庭ひく港
内に入来ル数疋の鯨を獵せんとて移民営すもし御試業
をし後四三亥年春夏は島中濱方共官許を得て
鯨獵船を仕出し来り此方を雇ひ近海にておゐて弐疋
を得しく他國より且又此浦の淡水多くして漁船に便

今此き入港船の當水を此浦を水取場として汲のとす
一 大村 大濤の西岸にして海に沿ひ平地多く廣し外國人
耕種居住するもの此村を第一とす今英人ジョージホー
ツン、ジョセフカレン、ウイルレムゲレ葡萄牙人ジョンブラボー其
子ジョーヂブラボー各家屋ありて畑地を持てりカナカ人
ペパレ家屋ありと云ふとしセイボレ者の畑作耕し居れり此
地東は浜瀬川を隔て奥村に接し裏手は宮の濱に至り
て奥村は男ひ南は海口に至りて洲崎村野牛島に接し
斜に其対を前に一岩あり烏帽子岩と云ふ
一 宮の濱 白濱にして平岡と向ひ浜瀬方山越まで往来

は近頃年貢
太神宮を勧請せし旨記録にある處也西兄島と一海
峡を隔て東岸あり此峡底深にして島山の下に接ま
る故に風波避へし大船も暫時は碇泊し得へし
一 三日月山 大村後手の山なり岩石峻しく燧石多く有
り香筆ある枯樹を多し
一 兄島 古名也父島の附属の最大島にして父島の
北にあり宮の濱と相対し其間僅に十町に満たずで南北
一里四町東西壱里七町周廻四里五町程あり周囲皆
絶壁にして登るへからず唯南の方東島と斜に相対せ

る方に出濱ありて船つけよは通しといへとも浪高き時ハ
陸と危険なるへし 二條の河水流れて海中に注けり 廻
見の平路と初めて此地に野陸なし 殊に野陸ト濱と
名付ぬ 此奥山に連りて平地あり耕鑿なるへし 英人称
して ホツクレンといふ 又牛島とも呼ふ

一 見返山 島内の最高山にして 此に登る時は父島を
一望の中に盡すへし 故に名付く 山の北の方に深みて平高
の岡地あり 耕鋤なるへし 野牛多く住めり

一 瀧の浦 古名なり 兄島の西海岸にて山岸より海に
落る瀧あり 故に名つく 瀧口より流れに沿ふて登るへ
しと云 此海濱岩石多くして甚た険阻なり 古記に金
砂あるよし見ゆれとも今更詳ならし

一 弟島 古名なり 兄島の北に連りて父島を距ること一
里許なり 島内悉く岩石にして海岸も亦砂濱なし
南北一里余東西二十町余周回三里弱 英人是をステー
プルトンといふ 又勝島と呼ふ

一 東島 父島の東にありて初寝浦の前に当り相距る
事半里弱 南北二十町余東西五町 周回二十丁余
半島内積平衍の地ありといへとも周回岩石高く峙
ちて小船寄りとも繋きかたし

一 西島兄島の西に当りて父島大村の沖にあり父島を距
ル事二十餘町島上平地ありて赤土あり島民畜ふ耕耘
する者ありと見えて畑の形ちなき所なる者数多あり樹木少
く岩石も多けれは南北七町許東西八町周回二十八町
一 南島古名袋港島といふ父島南岬の南にあり相距る事
十町餘島内悉く岩石にして絶て樹木を生せす全島皆
磊角の如き石にして堅牢なり赤石乱の垂し変も有
径一町程の池あり縁に一渠を以て海と相連る湛所全く一
池なりしか地震の為にさけくま連りしものとおもふ
されは是即原稱袋港なる事岩石を截る事数多くして

周囲し内砂原ありて二池あり其一池を殊深の内にして
激浪を為し是岩下海に通するに見ゆ魚多くして深さ
斗り難し其一池ハ潮渋にして生せす実に古池なり其上岩石
ことに潔白にして積雪の如く全島中第一の奇石といふへし
南北十一町許東西四町許周回二十五町余
一 小島 弟島の北東に当りて周回四十丁程もあるへし周囲絶
岩にして登るへからす全島皆岩石なり
一 母島古名也父島の稍西にあり英國經緯編 東百四十二度
九分北緯二十六度三十七分十秒にあたる父島を距る事
十三里餘南北四里東西二十七町周回九里此島樹木多く

甚しく父島の岩石多きか如くならん此陳猶疑はし
と云ふとし船を繫くへき港なき故ゆへ住民皆も父島に合て
ありし西人所称ベーリー島是なり
一 沖村　古名也母島の東中にあり英人ジエームスマツレス
此に居住すマツレスハ初め父島洲崎村に居住し別所細
地を所持なりしか西洋千八百五十七年此所に移住せし
由尤も前英人三人此地に住ありしかマツレスと移住の後皆
去りしに千八百五十三年亜米利加軍艦の達し墨
書る文書あり同人の語しに此村方後の山手に其文字
識記のし石碑ありしか前に居住せる英人ともに林國の軍
艦にや来泊し此積載を持去りしと申立り定めし我國
漂民の石塔なるべきにもあらざりしや将古記中
大神宮を此地に勧請せる由もあれは或者古は旧蹟なりとも
測りかたし
銅板に彫刻せし横文和解
此南方諸島を往々合衆國軍艦プレマス船号指揮
役チヨンゲレ人名并に士官コモドル役名ペルリ人名
の命に随ひ亜米利加合衆國の為に巡見して之
是を記録す
千八百五十三年第十月三十日

一 田港　港内狭小暗礁多くして大船を泊する事能
はず村内清水あり此港に近く此港二湾に分れて一ハ
沖村の前に湾回し一ハ服浜の前に湾回る礁石多く
小船を此に繋ぐべし故に諸国の和船此に輻輳するもの
も多くハ碇を此港の外南の方五六町或ハ七八丁の湾に
下ちり國臨丸七八艘あり

一 服浜　沖村港の南手にいて沖村の服にあるを以て名を
得たり海浜礁石多く船を繋ぎ難しといへとも山足廻る
平地あり依て開墾しくマワレシの所杯とあり此浜鉄
多く寄り来る故を以て又鍛ヶ浦とも名付く

一 南岬　全島の南端にあり

一 南浦　南岬ハ東手に向ひ海水湾を成して前に一小
島あり頗る平地ありといへども海浜礁石多く風浪至
りて且海峡潮勢強きを以て船を容るる事能はず

一 小富士山　南浦の稍東北一曲折せる所にあり山形駿州
富岳に彷彿たり故に此山より東手奥まり以て樹木生茂
りて山峯峙聳して野伏甚多く但し海浜に至り
ハ藤九郎（多名）多し

一 西浦　島の西手にありて山稜平地あり海浜礁石多
く大洋に向ひたる故を以て浪荒く船を繋ぐ事難し

三角岩　形を以て名つく南は出岬にあり

一　乳房山　全島の高山なり沖村西浦との方にあらし東は西岸の方に偏在せり四望皆同しく形ち乳房に似たり海面より此を望むもの皆此山を目して準を取りし山高實測四百二十六尺樹木繁る繁し

一　剣先山　乳房山より南山を隔たり南は沖村の東に偏在せる孤山にして其西麓は草木生せ生し此山沖村港より望むに形ち剣先に似たるを以て此名附けたり

一　險阻にして攀躋すへからす

一　東岬　島の東に在り島の東側悉く絶壁にして海濤を衝すといへとも船泊すへきの地なく又開墾すへき處も尠し僅に絶壁の間に野芭蕉棕櫚等間諸叢生せる様海上より望見せは画岩の如くに見ゆ

一　沖村　島の西南に在る所今新島に此名を附けたり海濱露石多くして其地廣く開闢せり外国人いまた此地に居住するものなく未開闢なりしものの如し　然れとも一土島へ渡航する時は此處より山越ゑ沖村は振く事を得且此島民野猪を猟する為度々渡航する由なり　一條ホ羅路を開き有　此道凡二里半　此地濱に有港と違く流は細小といへとも水を汲るに足し

一、同港島内第一の好き港なり港口西北に向ひて拡
し文島南岬と相対す口広さ二十余町奥行も之に同し
此港奥ニ到り三湾あり二湾ハ港口に寄して一湾尤大
なることの底形にして山間に回湾し西に小村の前に
当り此湾内海水深く且山脚出形をなるを以て湾口
より見れば異也と見へさる程なり故に風は廻るに便
なり二三百頓の船を碇泊する事は得へし
一乾岬　小村港の口乾の岬をいふ此岬海に出る事十町
余南岸とも絶壁にして登る事能はす
一兜岩　乾岬の前に立西人の称する要鬼岩の義なり

成して形なに由りて名付たる也
一片港　古名也今島の東手にありて山に倚て小村と
相背の形をなせり即ち石門岬より小の出岬とあり
にして一海湾なり海浜石門に近き方悪く磊石に
して山に依れる方稍平坦なり然れとも クスーの舶の外
小船といへとも湾口広浮に向ひ湾内狭き所へ入る事は
得かたす此地より小村に続き十余町の間平高の地北
橋り悪く閲潤もなし此港江涯救援ありて流出は
船免ハマツレシ同居人アレニ文島より此地に来りしに当りて
クチー船此處に寄き上陸の上実況上に小屋を庇陰

補ひ五七日清留病ひを養ひし由云り 此地海岸山
上ともに椰櫚榕樹林あり 此より西浦に連りて山中
林木多く 山猪多く棲り 南西浦字高山岩の間へゴ
多く生し へゴ谷と名付る処あり
一 石川岬 長滝の南岬なり 石川ある故以て名付く 石
川三門ありて門内三叉に成なし 海潮香由する抔勝て
奇絶なり
一 姉島 古名也 母島の南方に在り 距る事弐里半 南北
十六町東西九町周囲壱里十二町余 母島周囲に在る島
の内最大の一島なり 四方絶壁にして登るへからす 但小
所に向ひ岬西浜あれとも風浪悪しく船を寄る
事叶ひ難し 且浜は其間なし 直に屢高山なれは耕墾
もなすこと能はす 但し樹木を生茂せり
一 妹島 古名なり 母島の南稍東に在 其距る三里 南北十五
町弱 東西六町 周囲一里六町程 姉島に次く島なり 島
の形勢姉島に同し
一 姪島 新に名付て変なり 姉妹島に連りて稍東
西に有り 母島ゟ距る事三里十六町余 南北十四町東西
五町弱 周囲三十五町斗り 形勢亦同し
一 平島 新に名付る変なり 母島沖村と姉島との間

ニあり沖村を距ル一里十四町南北四丁東西十丁周
囲三十町程北の方ニ白砂濱あり十五石許あり船を寄
へし山上悉く平地ニして耕闢すへしと雖とも水乏
く且風当強きを以て住居ハ有りかたかるへし島内東手
小洲両濱子安貝多し此島一ハ英吉利國人とも號
漂泊せしと見へ山上陸底多し此島より沖村の方鯨
魚往来する事繁く且島内野羊多く棲り

一 二子島形を以て名く完小の島なり沖村の海岸ニあ
り

一 兄島右ニ同し饅頭島とも名付く

一 向島沖村と相向ふを以て名付く沖村を距る一里六町
南北十五町東西八町周廻一里十町餘島内過半瓦山ニ
して四方岩石多く東洲両濱ありといへとも風波烈しく
船筏寄へからす廻見の處隨て船を寄せ山上ニも攀躋
して地形を極めり耕墾すへき處見へす

草木禽獣蟲魚の概畧

一 蕃薯(サツマイモ)あり島中是を常の食として専ら培殖す畑
種付の如く二三尺盛ナルハ若芽を摘ミ捨てお
けハ六七ヶ月を經て大サ六七寸廻り八九寸程の薯を

三四根なとあり是二月頃より八月頃まて植付ともに喰ひ
内地の品と異なることなく淡白なり長芋と薩摩芋との間なり
あり尤多く造り食用の外入港の鯨漁船等に売渡すあり
島民小児を産して母乳の乏き時ハ其代給するもあり煮し
液汁と為し以て代用すとあり凡一斗入桶一荷まて價
弐ドルラル也

一 葱あり毎十二月頃より畠地の畑ニ植付是三四月頃ハ塩漬
其葉を去り根ハなる茎のめさき玉となし其後洗ひ乾し置ひ
年中の食用となす凡壱升二三合程ニて價壱ドルラルな
り

一 麦二月頃唐からこしを造り四月頃実り日に乾し粉となし
て囲ひ島の食となる実茎とも内地の品と同し湯煮して
これを食ふ

一 西瓜（スイクハ）形ち長し其大なるもの長弐尺五六寸廻り四尺六七
寸もあるへし其味の美なる事内地乃品乃及ふ所にあ
らす尤殊に多く其種子ハ先年米利堅商船の者へ乞ひ
ウ植渡りし由なり一ドルに付凡三四なり内地ノ西瓜も渡りし
ニ形味とも異なる事なし二ヶ地の品ニまし送り来るなり

一 胡瓜是も大なる事なし味薄くして甘からす内地の
産よりも大なる物なり

一 きう里何ゝ内地の果と同し一時ニ熟して盛り甚た短かし

一 大根も此地なる短かくして股をなし味ひ苦く甚た悪し
多く造らハ我持かへりし種ニて作りしニ地味のよき為
まては内地と異形ならハ赤かりし色の所隠まては実ニ重ニ無益
忽ち葉を生しぬ

一 蕪 是又本ニ存したれとも商試しニ内地モ不異向来尚多
の所産となれり

一 ヤームと唱ふる一種の芋あり形ちハつくね芋の如くにして
味ひ劣れり是山中ニも自年生ありて大形なるハ径壱尺
五寸位もありし

一 タロと唱ふる芋あり是ハ沼或ハ谷間の水中ニ作れり
根を所嗜ひして茎を七八寸ニ切りて泥中ニ挿し置ハ十
二三ヶ月を経て根ニ一ツの芋成熟し子成生せす我里芋
とハ芋の親のことく其味劣るれとも其味同して食用
ニ足る茎葉とも形ち里芋の如し

一 唐芋ハ何れとも形ち長く一尺より壱尺五六寸或ハ又
丸くして太さ一尺六七寸廻りニて多類く如し味ひ粗にして
内地果とも大ニ劣れり八ツニ付價一トルラル位なり

一 茄子 是も此島ニ在来あり我持渡りし種子ハ能く所産

とかく作り是も其の蔭付たる翌年の実までも実をなすゆへ
枝をも重ねし四季絶えず食用に足る殊に地味よく庭を
しと見へたり尤茄子ハ地味の新らしきを好むものなり
一 茄も未だなき土地なりしに造り試しにて忽ち芽種を生
し熟せり去りし山嵐の為に害せられて収納おしまく
子當せハ可也食用に足るならん
一 味ハ如何よく生熟せし後いまだ経験せされバ遠識なる可
一年に両度も収納なるべし
一 唐からし是南島国土のものと云へ畑となく山野となく
自然に生ずる高サ四五尺ニも至る絶えず実成り従ふ辛く

異なるハ
一 甘蔗甚だ多く味ひ美はしく且ツ長サ五六寸廻りにも至
り国地とハ大に異なりいまだ製法経験せざるも亦遠識
し一ツなり
一 芭蕉甚多く花咲実成り従ふて実熟せ候ハ島夷是を殊
菓として食す味尤美なり製法したる餅のごとしおす
ことに肉に諸物微る事多く
一 パイナープルといふ一種のもの我万年青（ヲモト）の形に観せり
葉根に実をなし其形ち凡長五六寸廻り八九寸ばかり
皮ハ魚鱗のごとく美しく熟すれば黄色をおぶ味ひ美

ましく液汁あり柑子の如し國人も賞美とせし
まゝ見さる変あり鳳梨と呼ふ
一オレンジといふ一種の菓物あり南景洋といふ嶋の苗を送
り嘗ハ山猫に七八株を分寛斎に数株あり於九月
より十一月の間に熟す形ち橙子の如くにして味ひ九年
母より遥に勝れり是西洋人も尤も珍菓とする物なり
實に当島第一の菓物なり
一橘子の類あり形ち長くして三四寸大さも亦三四寸許
もある一種味よくして食ハ一つにて我柚子に代り又橙
子酸に代用すへし

一文久二戌年秋八月没島をし匠師何某将翁といへる
ものお移りきし当更年是の比より培養をし菜草木の
内金銀台欽巴豆の類暫時に繁茂して花実をむすばし
我此島にて去るに当らし向来島地益なくんばもの此菜等
木ぬ保護繁殖を怠らず一しと島吏に命して物けりそ
の種左に通り

東京内植弐本	生育	龍眼肉 是を八丈島へ植付ぬ物なり
蓮種備後弐株	生育	黄杏弐株
生荷蘇弐株	生育	甘草弐株
木香弐株		延胡索弐株

土伏苓弐株　生育　洋種杜中弐株　生育
肉豆蒄壱本　生育　呉茱萸弐本　生育
金合歓弐本　繁茂　祇合歓弐本　繁茂
巴豆壱本　繁茂　橄欖弐木　繁茂
使君子三本　生育　本蜜柑九本
雲州蜜柑九本　生育　九年母九本　生育
蒼充梅九本　枯ル　仏手柑九本
夏秋桃九本　生育　黄白柿九本　枯ル
紅白ちりし九本　枯ル　梨子九本　枯ル
大実林檎壱本　大実柘榴九本　半生

葡萄九本　枯ル　金柑三本　生育
真竹江南竹九本　胡摩竹壱株　生育
亀甲竹壱株　生育　蒲桃三本　枯ル
孟宗竹壱株　生育
右之外樹菓之類野菜類之もの播種するといえとも良農
なく耕耘培養をつとめハ向来追々経験して其功
を得ハ実蹟あるへきものも多かる西洋とりたて所あり
比しく此地を去らハ遺憾おのつから多かるへし
一飲水ハ家毎に井戸掘候も便ならしく汲事
なかし又浅深も岸畳し事闘ひて事ありし所ハ都て堀抜

の井ニあらされハ汲水を得るあたはす依て寧此島ニ
久しく在留して五月他國の船舶船中よりても水乏し
浦賀港ニ着しく見汲ある水を貴し何物ヶ此味ニ及
所無く也と互ニ語りしまて知るへし
一食塩ハ島民海潮を汲て大釜ニて蒸し造り成ニ細
末なりされとも甚廉なり大亀を塩漬ニしく貯へるニも
塩多く入されは是ニ需用しこれを捕鯨漁船よりも買求
置けり
一島民食料の為ニ何れも鷄豚并ニバリケンと唱ふ家鴨
を養ひ置候産殖をしむ鷄卵一トルラルニ付数十二ヶ宛
久しく在留し且日本の恩を受るおこりさる事より鶏
ヌ一トルニ付二十四ニ賣渡ニ至れりバリケン弐羽ニて一
トルより一トル半鶏三羽ニて一トルラル豚ハ小なるはニて
大なるハ五トル或ハ七八トルニも及ふ我輩も又鷄豚を調
ためして又久三年来の内ハ鶏三百四五拾羽ニも及ひ自
収る卵も亦乏しうらは食用ニ足りしなり此島之物の買
ハ鷄豚ともに遺棄ニ捨なけれハ後年益繁殖なるへし尤
此島並ニ先ニも命して三五年の間山ニある豚を獵ハ
一ヶ所ハ後年の為ニ自然生の野猪母島のごとくなるへしと
禁し置けり

一 以前より山中に鶏多し猟し来りて食用とせし此鶏山
中に産し自然に群集せるものハ飛翔する事雉子な
とのごとし故に家内にて猟し得難し
一 鳩あり園地の鳩よりハ大きくして黒く味ひ異なりて美味な
り
一 ひよ鳥多く群り来て来れハ数所に四五千羽を度し
橋棟よりもこ家内に留るなり四五月比尤多し
一 母島ニハ野猪多く是豚の野生せしものゝ如く猪形種ニ
ハあらず猟犬を連行き山中にて獲べし 弟葉退是を牙
四肢を縛て味ひ豚に異ならず野生なる猪のごとく牙ある

生したる物もあり
一 野牛(ヤギ)と唱ふる一種の羊あり諸島とも山中に産す殊
に母島兄島に最多く島民是を猟して食用とせり臭気
あれと日本人ハ食せず其他山中に産せる鳥獣あれとも
是といふ猛獣ハ多くなし山ニも野にも猫と鼠
ハ最も多し
一 全島海浜に大亀(シヨウガメ)多し島民是を食用の第一とせり夫
二月比より五月比迄を産卵の期にて浜中に網まて是を
附置て是を捕る旋亀来りて息を負ひ暁より
又ハ船にて漕出しものもし 六七寸の丈夫なる鉄を

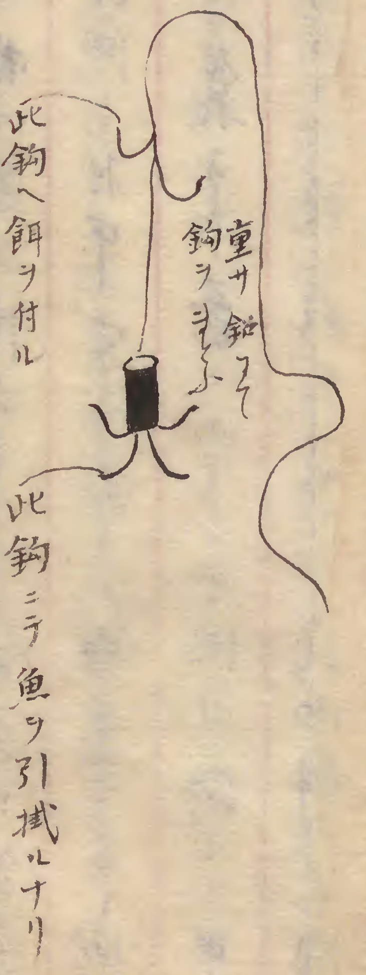
三河程國長柄を付し費ひ居れる旋亀の首へ引合して引
上るまで窮弱あり一尺の瑇亀を繋き置ハ一日ニ旋亀五六
頭ハ得るなり又五月頃より七八月頃迄の間ハ雌亀子を産んて
為ニ海濱の砂境へ日の没する迄待して上り来るなりま
た於ては直しく仰向ニなさハ其儘ニして動くあたはす補獲
するに尤易し其生質極めて遅鈍の物ニして人ハ寄
むるになし是は擅廣式七池中へ飼ひ置て年中の食
用ニ備へつて置の價三ドルラルなる處漁者大サ甲径式尺
五寸位より四尺位ニ及ひ貫目二十四五貫目位より六十貫
目程ニ及ふ故ニ於て直ちに微力のものハ一人ニて為し難

きものあり島民ハ其油ハ取りて年中灯火油并ニ食用
ふも供ふ其の腹甲ハ故下ニては鼈甲細工ニ供ひ四方ニ売
ろ付る所の價限を定め壹匁位よりよき品も弐匁位ともなし
蛇亀の甲ハ厚くして光澤もまたよし一尺まて腹甲斗り三四
百目程ハあるへし尤一種の鼈甲と唱ふるあり是ハ甚た稀
なるものにして肉ハ食用ニ供へ只甲のみを取れり甲の厚さ弐分
位より三分位ニ及ひ島民是ハ以て櫛ニ供ふものなり合せもし
して其儘にして削り造れり光澤尤よき品なり大さ前の大
亀と同し

一 魚類甚た多し暫時の手釣ニても数百の鰆を得る大魚ハ得

人と称せしハ十五六尋ゟ弐十四五尋の處有なり小魚ハ六七尋
位の處までも有なりされとも概ましく其ハ篤処して鉤に罹る事罕
上まてハ痩ものか多し形円なる魚多き所を撰ひつゝ海底
岩石の蔭所を出れハ魚多く陸地ニハ居らされハ是も海水深く
して弐拾尋以下の所を海底の様魚類所に見へさる所
魚類數多しと雖も異魚多く獲ハの鯛類ら異なる事海
るハ只黒鯛かしらかつほかさご鯖等深にて五六種のしまく
其地多くハ見られさる魚なり海鰻なとハ夥しくハ耳
或ハ牙なとあるしさるきつき形のもの多し鯛ハ海濱ニ居らす
鰯或ハ若布ニ手長海老多く用ゆれハ是を用ひて鉤餌

鉤餌とする魚ハ別ニ多く用ひても可也鉤ハ大さ一寸位より
三四寸位までもあり弐寸位の鉤なれハ大小共ニ魚ニ懸て堅之然
鉤ハ入港の鯨漁船より買取まり糸ハ弐三分廻りの麻の金
引糸之糸島民ハ左の圖の如く鉤を案出し稀に鉤なしもあり
是ヲ使用なりしも云海底岩石なれハ鉤ハ敢て鉤を失ふ事
多し



一　海濱白沙ニ處る鱗ハ無之潔白ニして形ち川鱗ニ似て
是よりハ至長く体細く其中穴より出て群集して沙埼
を走ることは疾きこと翼ありて飛ぶかことし其他川鱗ニも甲乙
大さ五寸ニも及ふあり能く形ち異なる海鱗ニも國地
と形ちの違へる物数多あり
一　大なる海老あり是島の南海岸ニして安島宮の濱ニ向
ひたる一處ニ洞穴あり是ヲ海老穴と名付く此洞ハ能深の
前ニ至りて岩石の隙ニ群集せる故捕獲すること容易な
りとかたく洞穴の岩間ニ多く棲居ひにも多し其大サ
頭より尾ニ至りて弐尺ニ及ひ味ひ甚美なり都の伊勢海老
と唱ふ形ち異なるハ尤色薄くして甲ニ紫色を交ひ二
三尺も調理さハ肉のみにて一尺の器ニ盛り餘れり
一　山間の谷川ニ蝦多く棲む大なるハ大サ六七寸廻りニして
長三尺ニ位ニ及ふ味肉甚美なりし味ひよろしく是は赤ニて
海老と唱ふる海老多し實ニ是を食ひ得へし
一　全島海濱ニ鮑ひ蛤の類多し宮村の沙濱へ蛤堀浦迄
鮑の種を前ハ海年繁殖すへしと思ゆるハ此ニ鮑
彼ニ附てなりし形容
一　全島周囲の海島ニ至りし海岸と生れし故ニ海岸ニ来寄
り等魚男ニ多し牡蠣の事を稀くの魚を以上ると直へ乾

きく飛ひ出る魚海濱岩石の際ニ多くあり時ありて海鋪
ニ見ることあり

一 岩石の際ニ生する皿と名付て径壱寸より弐寸五分位の形
ハ笠のやうな貝あり其形玉杓の如くにして大さ一寸位より弐
寸位の貝あり又四五寸位のものもあり大かた同し位の貝なり
いつれも而喰ひしニ味ひ淡として美味なり シャコ貝あり
食しにし尤柱のみをとりて食すれとも甚た美味なり

一 全島中にて蒼蠅の多き事実ニ甚たしく海濱も
殊ニ多し二月比よりして七八月比まてハ魚肉ニ至る臭
気あるもの群れたかりて至一つくれハ故ニ庖廚并ニ厠ハ
ニ居宅を離れし役人の下し肉なとおし置ハ暫時の間ニ子
を殖して腐敗をしむ食する節鼻口ニ入咽喉を害ハ咽
を通ふて陽臭く事あり或ハ硯の墨を嘗乾し墨汁のやうき
ハ包なとして所有なし又小茶の蚊多くして室中ニ入ルて人
膚を嚙て又油虫多く是ケロクルと呼ふ柜中ニ入りて物
を噛みて衣類敷物何処ニよれ捨置されといへとも
なし長さ寸餘ニ至る山野草叢中ニも多し

一 此島の樹木ハ伐るとも小作りても更ニ浮ふ事なし忽ち水
底ニ沈めりいつれも堅硬なるが故なり

一 全島四方の卅本程内地と異国を左右ニ揺くこと蓮鉢の形

右戊呂部病局の医師まて一時渡島せし 井口榮春
といふ者の圖写して持帰りし書ハ此者ニ問ひて写本れ
形状葉実を闕ふもし不数の異花のみし

異産之分

椰樹 ペニパーム 即野芭蕉と名付し 蒲葵 カーチ
ラワロイ 即ちタコノ木と名付く トマナー樹 マリー樹
ハウ樹 即濱桐と名付く シエカキーン タコノ木の蔓生凡ス プツリニ樹 ウート
パインアップル 即風梨と名付く 濱葛豆 ウリく木 毋高ヌ多し
柿欏（ボシユ）ゴ 即ヘ 檸檬 レモーン 橙 シットルウン
濱梅杷 此外不審の物五種

和産ニ於し異ナル分

タロ芋 甘蔗 番椒
葱 大蒜 南瓜
ハマヒルガヲ 玉蜀黍 トヘラ
文珠蘭 ハマユモト ウバメガシ 落生龍葵
薊 大紫白菜 良薑一種 クマタケラン 山梔子
柘 ヤマグワ 天瓜 大葉酸醤 クーズベレー
甘蕉 杜茎山 イヅセンリヤウ 土萎藤 ブドリカヅラ
田瓜 胡瓜 葫瓜
ハクラン ヒダ 芭蕉

垂花果　タマラン　キヽヨウラン

木椄子樹　白英

和産子同しき分

菜　大根　酸醤草

チヽグサ　菁　チトリ草

烟草　馬歯莧　ツル菜

蔓荊（ハマヤウ）　天仙果（コーテーグ）　雲實（ジヤケツイバラ）

松葉蘭　ナギラン　釵子股（ボーラン）

野シバ　山スゲ　岩ヒバ

天竺桂（ヤブニツケイ）　苦楝（センダン）　水楡樹（エボタノキ）

黄槿（ハマボウ）　冬葵（フユアフヒ）　椿一種

ムク榎　ハナヤスリ　冬青

羊蹄　ギシ〱　ソクヅ　木耳（キクラゲ）

馬鈴薯（ジヤガタライモ）　猢猻眼（サルノコシカケ）　蚊母木（ヒヨンノキ）

菝葜（サルトリイバラ）　ナンバンキセル　ヒヤクシン

苧　スモトリ草　柯樹　カシ　牡中一種

モツコク　紫菜荊（シヽロイイバラ）　アミタ

動物の分

野羊　猫　田犬

大蝙蝠　豚　伏翼（コウモリ）

水鼠　鹿　鼷鼠（ハツカネズミ）

鴎　烏雅（カラス）　白鷺

鴬　白頭鳥（ヒヨドリ）　鶏

大ルリ鳥　チドリ　洋鴨

鷹　鳩　ブベ　鷲ニ似テ背毛褐色 能ク海中ニ入テ魚ヲトル

未詳ノ小鳥　此島ニ多ク有メジロニ似テ 頬辺翼端黒色ナリ

附言

小笠原島并父島の港に入らんとする船第一に知る
べきは港口の暗礁なり其港口中間に至りて千尋に
して風波ある時は見る能はずよくよく心を用ゆべし

港口西北向ハ其南の方野牛島と唱ふる岩礁あり
ハ切迫して入港尤危し中央より北の方ハ暗礁多し且
碇泊の場所も岩石碇綱を切る所あり是港内中央より
南岸の方あり北より東大村と云ふ浜を去る事二丁程
の所まで来て港の奥へ入りて碇泊をハ甚安なるへ
し既に我船のはじめて此島を渡し成臨船も碇泊せし時
相は了碇綱を擦り切り碇を失ひしなり我嘉永六丑年
西国の水師提督ペルリの率ゆる軍艦も此港に来りて
碇を失ひしといふ

附て曰

越後國蒲原郡於松濱なる姓平野庵蔵後鯨漁の
義官許を得て外國船を買入所持せしが右船
を雇ひて文久三亥年正月江川太郎左衛門様御預
手附中濱万次郎船長と為り鯨猟を命せられ同
便船を以て小笠原島へ米麦其他諸品を持渡り
諸品陸揚の上傭船にて出立用意とのひ同四
月同港出帆近海ニおゐて鯨二尾を獲て再び同港
ニ立戻り同五月帰帆の折柄嵐を捲起しまそ
船の誘りなりしハ倍して大なる誘り五十石程と共ニ
付し候て其ま庵蔵船ハ嵐ニ掛りて引揚なり

至大なるを以海岸ニ流れしハ此ハ誠ニ珍らし
年物を根據るニ先年ペルリの率ゐる軍艦の矢
ひし大砲ニ中りしものなる事とおもはるゝ是を持帰り
て軍艦所に献しけれバ是一奇事なりと感嘆し
おきぬ

一 當此島ニ在留中各國の鯨漁船其他の船港ニ寄り見え
或ハ其ま水先案内を出して其の暗礁と碇泊の事と
残告知させしむウヘブ役附属ニ任し港外を望む事ニ便
ならしむる者ありし我国旗を揚し走入港船を見出して案内
ニもつへき旨残置るに付して相案内料軍艦ハ十五

トルラル鯨漁船にても商船ハ五トルラルツヽ成立より是ハ以前分島民の極め置くるまゝ新に出料を極めてるにあり

凡

一 此港に来りし亜米利加國の鯨漁船に鯨の種類を問ひしに左の如くなり

スペーム鯨（和名マッコ鯨ト云）	長サ四十五フート	油一バレル價 四十五トルラル
ライト鯨（同 セミト云ふ）	同 六十フート	同 二十トルラル
ボーベツキ鯨	同 六十フート	同 二十二トルラル
ホムベツキ鯨（日比又鯨トいふ）	同 四十フート	同 十六トルラル
ヒムベツキ鯨	同 四十フート	同 十六トルラル
モツスルデツキ鯨	同 三十フート	同 八トルラル
ケレムヒエツス鯨	同 十八フート	同 十六トルラル
キツレル鯨	同 十八フート	同 十六トルラル
フレツキヒス鯨	同 十八フート	同 十六トルラル

但一バレルは一頭八分の一なり日本秤量三十二貫目程に當ると云ふ

一 外國鯨漁船乗組者の給金ハ年月によらす定めるにハあらす捕鯨の多少によりて是を分ると云ふ

鯨油百八十樽の一　水主壱人

鯨油八十樽の一　梶取壱人

同　四十樽の一　第三等操針役壱人

同　三十樽乃一　第二等操針役壱人

同　弐十樽の一　第一等操針役壱人

同　十弐樽の一　船長壱人

但壱樽ハ一バレル也

一 我等此島ニ在留せし内ニ入港の鯨猟船左之通島民食し鯖ゟ品を船へ売渡しく衣服器物と交易さし呉れ是者ニ入港船の行るを希望さる由之人ニしく又鯨猟船ニ本国より積との布段或ハ小道具器物を携へ来りて右之小島迄立寄り商便ニ売渡すを鯨猟家の業礼

右之通り候り

一 亜米利加鯨猟船　戌年二月二十日入港神奈川港へ丁集既ニ付江戸へ三七日用状托し遣シ　船名フロルテイ

一 同国船　同年三月入港同十日出帆　船名子ヒイー　船長サーハント

一 同国船　同年三月十四日入港同十四日出帆　船名ノスチコセツ　船長コネルヒージリング　乗組人数三十二人

一 同国船　同年四月廿九日入港即日出帆　船名フリツキアンジー　船長トルニー

一 同国船　同年五月朔日入港同十五日出帆　船名コーウイングトン　船長セヒゼンガス　人数九五人

一 同国船　同年五月廿九日入港即日出帆　船長のミ来ル　船名ホープ　船長ギツフルト

一 サントーウヰス　ヲワホー附属鯨猟船　同年六月十五日入港同九月三日出帆　船名ワイルア　船長ラス　人数二十六人　四月十六日ラドロチン島出帆し来ル

一 亜国鯨猟船　同年七月十日入港八月三日出帆　船名ホープ　船長ギツフルト　人数二十三人　再度

一 魯国蒸気運送船　同年十月廿二日入港十一月四日出帆　船名サナートヨーレス　船長スラニロース　人数五十六人　ピイトルポールスク来ル　書状托し遣ス

一　サンドウーイス鯨猟船　同三亥年二月十六日入港同廿四日出帆 船名バルベスト 船長ロウロント 人数三十五人 カラ島ギヤム島出帆ニテ来ル

一　亜國鯨漁船　同日サンドウヰス船の船も与同船より来ル 船名プレゼンセー 船長フエルブル

一　同国船　同年三月十五日入港同廿日出帆 船名ニウベドウベドウラルト 船長ナイ 人数三十五人 南アメリカの内トムベスより二ヶ月餘前出帆にて来ル

右船長何ミも口役蛮より来り日本まく此島開拓せしを歓
ひ向来諸品を於海り船中の欠乏品沢助弟ら或ハ極女氏
事とすてとあらハ此島なれハ寄港して此迄西鯨漁船新西
牧島なれとし薪水其外を支る船のし入港なしまて其他ハ立
寄らハとし諸欠乏品を補ひ足りなハ惣入港まてしとも
鯨猟船ハ一ヶ年或ハ一ヶ年半程之北方へ上陸するのなる
ら如之し候由

右附録之事五島中　文久元年辛酉十二月より 同三年亥五月まで　見聞なしつる事
又自らる法を記し多くの後来家開拓のことを記しく為し
用也此ハ事の幸甚也

小花作之助 花押

昌平文庫

国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan